

京都部落問題 研究資料センター通信

第5号

発行日 2006年10月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター



本年度は「京都の被差別部落と教育」をテーマに連続講座を開催しています。第一期として五月から六月にかけて三回にわたり、明治から大正期の京都での教育をめぐる状況をお話していただきました。

報告

部落史連続講座

京都の被差別部落と教育 I

第1回

京都の番組小学校と女紅場にようば

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

報告 中島 智枝子

二〇〇六年度連続講座第一回目は五月二六日、『京都の部落史』第一巻及び第二巻の近世及び維新时期を執筆された辻ミチ子さんに、「京都の番組小学校と女紅場」と題して講演していただきました。『転生の都市・京都』（阿吽社刊、一九九九年）をはじめ『女たちの幕末京都』（中公新書、二〇〇三年）、『京の和菓子』（中公新書、二〇〇五年）と京都についての本を相次いで出されている辻ミチ子さんのお話は、千年の王城の地として繁栄してきた京都が、明治維新を迎え直面した遷都Ⅱ「車駕東行」をどのように受け止めたかから始まりました。

遷都という事態に対して、地方都市に没落させてはならない、このまま「古都」になってしまっただけはいけない、そのためにどう頑張っていくか京都の意地の見せ所であったと述べられました。このとき復興策としてとられたのが教育と殖産興業であり、教育は政治と切り離せないという考えをこめた「政教不岐」という理念の下に取組みが始まったということです。

京都といえは早くから町自治が始まったところですが、この町自治は室町時代から始まり、豊臣秀吉によって地子銭が免除されました。江戸時代には町内が経済力を持つようになっていきました。その京都ですが、明治維新を迎え、天皇と共に公家や有力な大商人が東京や大阪に移住する事態を迎えます。京都府では町自治の伝統を持つ町人の力を利用して小学校教育を実施しました。それが日本で一番早く開かれた京都の番組小学校です。京都府は、小学校を作っていくにあたって町組の経済力を同じにするため、二度にわたり町組を改正し、一八六九（明治二年）一月の二度目の改正で、それまでは二条通りより北を上京、南を下京としていたのを、三条通りより北を上

京、南を下京とし、上、下京地区を三十二の町組にして、それぞれ一番から三十二番の番号をつけ、合計六十四の番組を作りました。そしてそれぞれの番組に小学校が置かれました。一番早くに開校式をあげたのが、一八六九(明治二)年五月二一日の柳池小学校です。

当時の学校は、小学校兼町組会所という小学校で、教育を行うと共に中年寄や町の年寄等が詰め、町民を集めてお触れを読み聞かす会所の機能を持ったものであったということです。そして、学校経営のため小学校会社がつくられました。この会社は松方デフレ期にはなくなりました。

このような中で被差別部落はどのような展開をみたのかといえば、解放令が出されるまでは三条より南、鴨川より東に位置する天部村(現在の東三条)の町組編入は考えられていなかったということです。解放令後、天部村は二分され、三つの町の内、二か町が下京二十五番組(粟田学区)、一か町が祇園を含む広域の下京二十四番組編入されました。天部村が二分された経緯や他の町との間でどのような確執があったのか等については史料も残っていないので不明な点が多

いということ。その後、粟田学区は変動はありませんでしたが、二十四番組は広域のため分割されました。これは差別の問題があったのではないかとことです。また、天部村に隣接する非人集落の寺裏もこの時、下京二十四番組(有濟学区)に編入されました。

京都の遊所の中心である島原ですが、下京三十二番組に編入されました。同組は畑の中にぼつんとあった地域です。島原だけでは小学校は建てられませんが、どのくらい学校に通う児童がいたかわかりませんが、この地域については二十二番組と三十二番組が合併して出来た淳風学区に編入されたという事です。それまでの親町や古町や新町といった町内の格式の差は一九世紀に入り次第に薄れてきていたということですが、このときの町組改正はどの町内も同等にあつかわれたという反面、差別の問題も存在していましたので、これをきちんと押さえておかないといけないのではないかとという指摘がありました。

この時期、郡中の蓮台野村では、益井元右衛門、茂平親子の尽力で学校が建てられ、京都府は小学校と認めています。また、益井茂平

はここでドイツ語を教えています。また、柳原町でも桜田儀兵衛ら有力者が小学校建設に尽力しています。

この後、一八七二(明治五)年に学制が出され、小学校教育が義務教育となります。京都ではこの番組小学校のほか、一八七五(明治八)年、番組小学校に夜学が開設されています。時代は少し後になりますが、子守労働に出て来ている子供たちを対象にした学校が明治四〇年代に入り作られました。私立子守学校です。これが後に社会法人明德学園になり、現在の明德高校や成章高校の前身であります。

また、女子教育の場として女紅場が京都では作られました。京都府が創設したのが新英学校女紅場です。これは、中・上流階級の女子に近代的な中等教育と手芸や家事を教え、良妻賢母の養成を目的としたものです。そのほかに多くの女子は小学校付属の女紅場で手芸や家事を学びました。やがて、これらの学校は学校制度が整備される中で手芸学校となっていくようになりました。現在も残っているのが遊所に作られた女紅場です。

一八七二(明治五)年、娼妓の解放令が出されました。京都府では、

遊所で働く女性たちに対して、「困い者」ではなく手に職を持つてもらおうということから婦女職工引立会社が一八七三(明治六)年に作られました。そして翌年にかけて、京都市内の遊所に女紅場が作られました。女紅場では、裁縫、袋物、扇子の製作や鹿の子絞り等が教授され、養蚕が行われました。養蚕や製茶は失敗したということ。このほかに教科教育も行なわれ、祇園女紅場では番組小学校の教師が教授に付けてきました。宮川町歌舞練場には当時の京都府知事が書いた女紅場の看板が残っているということです。

京都が遷都の逆境を乗り越えるために教育と共に力を注いだのが殖産興業でした。殖産事業として考えられたのは、従来の伝統的産業ではなく、製革、製靴、牧畜等のように欧米の産業技術の導入です。京都府は、製革、製靴産業の基になる牧畜場を鴨川東側の荒神橋に作っています。また、このために、一八七二(明治五)年には、アメリカ産の牛や羊を輸入しています。製革場ですが、高瀬川七条上る、桂川西側、三条東、桂川と鴨川の合流する西岸等に作っています。西洋式技法で製革を行い、

学びたいものには学ばせるといふ方針でした。これらはいずれも部落に近接したところです。勸業場は河原町二条下がるに作られました。ここでは、土族からも学生を選ぶ等新しい動きも見られます。勸業場では洋式靴の製造が行なわれました。欧米の技術の導入を図りますが、とはいえ、部落に隣接したところに開いたことから部落の人たちの地道な取組みを抜きにしては考えられません。この辺りのことはまだ余りわかっていないということです。

京都府の殖産興業策を考えると、山本覚馬と明石博高の二人の存在が非常に大きく、彼らを中心にして横村正直知事の下でとられた京都府の殖産興業策も、情勢の進展から民間に払い下げられはじめ、一八八一（明治一四）年、知事が変わると共に新しい道を辿っていったということです。

明治という新しい時代を迎えた京都が、遷都という深刻な事態を打開するためにとった方策が番組小学校の建設であり欧米の技術を導入した殖産興業策であったということですが、教育を重視し、それを実現させたのは京都の歴史が築いてきた町自治を抜きにしては

考えられませんし、京都の民衆が示した「意地」を無視することは出来ないでしょう。とはいえ、被差別部落への眼差しには厳しいものがあり、京都の町自治が大きうたちはだかったことを思わずにはおれません。

今回の講演ではそれぞれが一つ一つの重要なテーマであるにもかかわらず、非常にわかりやすく説明していただき、遷都直後の京都の様子および解放令直後の部落について知ることが出来ました。

第2回

協同夜学校と竹中庄右衛門

講師 中島智枝子さん

(帝塚山大学非常勤講師)

報告 湯浅孝子

六月九日、中島智枝子さんに「協同夜学校と竹中庄右衛門」と題して講演していただきました。

中島さんはまず、京都において部落と教育を考える上で「協同夜学校」は大きな位置をしめていたことを指摘され、協同夜学校があった京都東三条部落と設立者、竹中庄右衛門について、資料「京都坊目誌」をもとに解説されました。東三条部落は江戸時代には天部村

と呼ばれた役人村であり、皮革業が盛んで、交通の要所である利点から繁栄していましたが、明治維新を迎えるとその経済基盤を失い、明治一〇年頃には、急激に疲弊していききました。中島さんは、村の指導者として部落の改善に力を振るった竹中氏が、部落の子ども達への教育保障のために取り組んだのが、協同夜学校の設立であったと述べられました。

次に、当時の新聞記事から協同夜学校のあゆみについてお話をすすめられました。一八七八（明治一

二）年四月、竹中庄右衛門は、部落の会所跡に夜学会を設立し自ら指導に当たりますが、子どもを仕事の助け手と考えている親達は「そんないらぬこと」と非協力的で、生徒は集まらず、ついには運営資金難により閉鎖となります。しかし彼は、一八八六（明治一九）年頃、再度夜学会を開き、小学校の篤志な教員を招いて指導を行います。やはり親達は冷やかな反応で、「ためにするようには」という誹謗と資金難によって閉鎖してしまいます。一八九四（明治一七）年、三度目の開校を試みるも、今回も資金難のため頓挫してしまいます。竹中氏は諦めることなくこの後、

資金の手当てのため「教育講」という講を起し、遂に一八九七（明治三〇）年、四度目の夜学校の開校を迎えます。このときは教業町、長光町の有力者と協力、区の学務委員、校長らと話し合い、校舎は長光町の借家、それぞれの町が属している小学校からの教員の派遣をうけ、生徒数は二〇余名からの出発であったといえます。翌一八九八（明治三二）年五月、竹中氏らは「貧民協同夜学校」として設立申請書を提出しています。

一九〇四（明治三七）年、当時としては京都市内で唯一の夜学校であり、順調に子ども達が通学していた東三条の協同夜学校は、京都府より私立学校としての認可を受けます。協同夜学校に通う生徒数は、私立学校として発足してからは増加し続け、一九一一（明治四四）年の一七九名を最多にして、大正前半期まで一四〇〇〜五〇〇名で推移するが、一九一六（大正五）年を境にしてそれ以降、二桁台に減少します。さらに、夜学校に通う生徒の階層については上流層が〇%、中流層が三〇%、下流層が七〇%と説明されました。また、全体の就学率は、本校のみでは三九・三%、夜学校を含めると八六・八%

となっていることを指摘され、東三条において小学校教育を保障するために展開していった協同夜学校の果たした役割は大きいと述べられました。

学制がしかれてから、京都では、就学のための奨励がなされますが、貧困者の児童に対する就学のための取り組みは、一九〇五（明治三八）年の学用品貸与その他の援助のみで、夜学校の設立や補助金助成などの対策はなかったのです。そのような状況下にあつて、一九〇七（明治四〇）年、一〇周年を迎えた協同夜学校に、内務省から二〇〇円の補助金が下付されます。これは、協同夜学校の年間予算の半分に相当する金額です。この背景について、日露戦争以後に起こった地方改良運動の動きのなかで取り組まれていた部落改善政策の動きのひとつが補助金の下付ではないか、と述べられました。さらに、中島さんは同年三月協同青年会も結成の動きが起きていることから、夜学校だけではなく、青年会も作つたうえで改善事業をすすめていくことが企画されていったのではないか、補助金の下付によって、教育の場としての夜学校ではなく、いわゆる地域の改善事業を進めて

いく一つの拠点という形に変わっていったのではないかと分析されました。

通学する生徒数も順調に増え、二年続けて内務省から補助金が下付された一九一一年（明治四四）年に、協同夜学校の設立に尽力した校長・竹中庄右衛門が没します。その後、夜学校の経営を引き継ぐのは、京都市の教育の普及発展を目的として設立された京都市教育会でした。この「京都市教育会」期に校長となつたのは小西信太郎で、資料から子どもにお話を聞かせることが上手で熱意をもつて夜学校教育にあつたと読み取ることができま

す。小西氏は協同夜学校が二〇周年を迎えるまで校長を勤めました。京都市教育会期の、大きな出来事は、夜学校の校舎の改築と、指導内容が改められ、勅語の暗誦、貯金がおこなわれていたことです。

しかし、学用品や教科書は潤沢にあつたわけではなく、学用品は支給されるものの、教科書は古本を集めたものでした。この状況は、大正前期にも続き、学用品の高騰により貧困のために学業を諦める者が増加するという、厳しい子ども達の実情に触れ、京都市教育会婦人部が、学用品無料供給等の活動を

をして、五月には皇后の使者からも両校に一〇〇円が下付されました。

協同夜学校二〇周年の一九一七年（大正六）年に「一心青年会」が結成されました。中島さんは、青年会会則の「教育勅語及戊辰詔書の趣旨を奉体すること」「忠君愛国の精神を涵養すること」に青年会の果たそうとする役割がうかがえ

ると指摘しています。会員から選出された班長は、町内を巡回し、賭博や風紀を乱す行動を派出所に報告することを職務のひとつとしました。青年会の会長に警察署長が置かれていることを指摘し、警察署長をトップにおいて地域の風紀を締めるために戊辰詔書、忠君愛国の理念を重んじる一心青年会が結成されたことを強調されたうえで「米騒動と協同夜学校」について詳細に述べられました。

一九一八（大正七）年に起こった米騒動は、京都では被差別部落が主体となつたものでありますが、東三条では、他の地域とは大きく異なる動きをみせます。このとき、一心青年会が中心となつて、村の有力者を集めて米を出させ配布するなど事態の鎮静化を図つたため

東三条において米騒動は平穩のうち

最後に簡単なまとめとして、中島さんは次のように述べられました。

協同夜学校は、私立学校の認可を受けた後も厳しい経済的な困難にさらされるが、貧困により通学を断念せざるをえない厳しい状況にあった東三条地域の就学率を引き上げ、卒業後中学に進学する生徒もいたなど、子ども達に将来の進路を切り開く力をつけた。協同夜学校の存在は、東三条での教育の実現に大きな役割を果たしたのではないかと強調されました。

協同夜学校は、私立学校として認可を受けた頃に取り組みが始まった部落改善事業の一端を担うことになりました。米騒動をきっかけに、政府や行政が部落改善に本腰で取り組みをはじめることになります。その時にとられた部落改善の施策は、東三条に積極的に講じられ、担い手となった一心青年会の事務所が夜学校内に置かれていたことから、協同夜学校が東三条地域の重要な拠点となっていました。考えられると述べられました。そして、現在、協同夜学校の設立に奮闘した竹中氏を取り上げた劇が、地元の小学校で行われ、教育と努力の大切さを子ども達に伝え

ていることに触れられ、講演のまとめとされました。

第3回

田中親友夜学校と上田静一 講師 白石正明さん

(九州大学非常勤講師)

報告 金森 襄作

六月三日、今年度三回目の連続講座が白石正明さんによって行なわれた。白石さんは以前『京都部落史研究所報』第三三・三四・三五号(一九八〇年)で「上田静一と田中親友夜学校」を発表されたが、今回はその新たに見つかった資料を基に、第三次小学校令公布以後の田中親友夜学校の動向を含めて発表された。

一九〇〇(明治三三)年公布の第三次小学校令は、教育期間三・四年を四年に、授業料を徴収しない、進級テストを行わないなどを骨子とし、教育の機会均等化を図ろうと「義務教育」という名にふさわしい体制をとり、その後の教育制度の基になったといわれるものである。しかしその実、就学猶予と免除の制度を維持することによって差別を存続させ貧困者への教育

の普及は期待通りには進展しなかった。そこで京都府は一九〇六年、不就学児童対策を積極的に行うに至った。

この京都府の施策の追い風もあって、田中部落の有力者早瀬円蔵や浅井清三郎らは、不就学児童にぜひ教育を受けさせようとして「教育講」を組織し、その利益で夜学校を設立すべく田中尋常小学校校長木村弥一郎・訓導上田静一らと共に奮闘してつくられたのが、一九〇六年一月に設立された「田中親友夜学校」であった。設立当初の教員は上田一人であったが、彼の必死の努力もあって、教室拡充・運動場建設・教員増員・女子教育拡充などが順次図られ、児童・生徒数も増大して夜学教育は田中部落で定着・発展していった。

しかし夜学校の拡充は、部落の自助努力が基盤となっており、府からの支援は限定的なものであった。そのため、一九一二年の浅井清三郎の死去によって、「教育講」の破綻が夜学校の基盤を揺るがすこととなった。その結果、夜学校が担保に入っただけでなく、夜学運営費の大半がこれに依拠していたため、夜学自体も存続の危機に直面した。青年会の支援、京都柳

原銀行の教育講整理、村からの補助金交付など、その存続のために努力も行われたが、資金難解消には及ばず、一九一六年に廃校となっていました。その折、在校生たちの行く末は把握できない。私塾のような形で細々と継続していたと語る古老もいるが、その詳細はわからない。その後、本校である田中尋常小学校は一九一八年四月に京都市に編入された際に、養正尋常小学校と改名したが、その際に夜学の生徒が「二部授業」に組み入れられたかどうかもわからない。上田静一もこの教育講破綻の頃から、「帝国公道会」に参加し、部落民の北海道移住に関心を深めていき、一九一六年末に夜学を辞め、北海道移住に尽力する道を選んだ。

最後に、夜学校運営費を充当した「教育講」の内実、夜学で学んだ児童・生徒たちにその教育がいかなる影響を与えたのか、また青春をかけた上田静一の情熱の源泉は何か、さらに彼の部落差別解消の論理(意識)など、まだ解明すべき課題も残されている。

本の紹介

秋定嘉和著

『近代日本の水平運動と融和運動』

吉田栄治郎

二〇〇六年九月に部落解放・人権研究所から刊行された、論文集としては二冊目になる秋定氏のこの本には、一九七二年から二〇〇三年までの間に発表された十三本の論文が、序章、第一部 水平運動（六本）、第二部 融和運動（六本）に配置され、氏が「あとがき」でいう「遺稿集」にふさわしい様として各論文への「追記と回想」がそれぞれに付されている。与えられた紙幅が少なく各論文へのいちいちの評ができないため、通常の書評の体裁とは異なるものになるが、筆者の関心に沿って本書全体を評してみることにはしたい。

序章「部落解放運動史における水平社と融和主義の問題について」は一九八〇年に発表された「部落解放運動史における融和主義の問題について」を改題したものだ。戦前から戦後の部落解放運動の評価をめぐる議論を融和主義を是とする氏の立場から整理したもので

あり、以下の一節があるこの論文に「追記と回想」を付して序章に置いたことで「遺稿集」という意味が鮮明になったと思う。

十六頁八行目から十七頁一行目

たとえば身分差別と階級的貧困という二重の差別をうけ、最も矛盾の集中したところであるというのは、理論的にはそうであるにしても、それが社会主義革命との連結でしか解消しないとするのは、一つの現実無視と論理飛躍があるのではないか。差別がきびしいということは資本主義社会の階層のなかで、より即時的に、せめてブルジョア的に、一般民と同じように解放されたいと願ってはいけないうことなのか。（中略）戦前からの、孤独な左翼革命の強力な味方としてあってくれという願望は、このあたりで反省すべきではないかと思う。したがっ

て研究上の反省としては、たえず社会主義革命（ボルシェ）の課題と関連して運動史を整理してきた従来の研究史の批判という視点と、さらに、たとえ融和主義といわれようが、体制内の努力であれ生活擁護と改善につとめ、差別の解消にたちむかった方向とを重ねあわすという研究上の模索が要請されるのではないか。

の箇所だが、ここに本書を流れる通奏低音の一を聞き取ることができ。また、「追記と回想」の三二頁十行目から十五行目だが、

藤野豊は「水平運動史研究の視点」（『部落解放史ふくおか』第六号、一九九二年六月）のなかで、「研究者が運動体から自立する」ことの大切さをのべている。（中略）この点について、多少の弁解になるが、筆者は、研究上の引用などは立場のちがいはあれ、「注記」などでやってきたつもりである。しかし、部落問題研究所側の研究者の部落解放・人権研究所の研究成果への発言は少ない。藤野の前掲論文は積極的な交流案の論文であった

が、つづく研究者は少なかつた。

に通奏低音の二を聞き取れる。

前者は秋定氏の部落問題研究に向かう基本的な姿勢を示したものであり、後者は愚痴である。前者のようにあろうとするかぎり「孤独な左翼革命」の側から「強力な味方」とみなされる日は決してやってこないのだから、敵として収容所に送られるか、ギロチンで首を断ち切られないだけでよしとすべきなのだが、秋定氏はそのことを百も承知の上で愚痴をいい続ける。おそらく二に流れる通奏低音は、秋定氏が途切れることなく聞いている悩ましいかぎりの耳鳴りなのだろう。

また、藤野豊氏にいかなる含意があつて「研究者が運動体から自立する」ことの必要性を提起したのかは知らないが、その言葉に即せば至極当然の提起であり、秋定氏はその意味では疑いなく自立した研究者である。しかし、「体制内の努力であれ生活擁護と改善につとめ、差別の解消にたちむかった方向」を「たとえ融和主義といわれようが」と評することは不可解なためらいと戸惑いであり、解放されない、したがって運動体で

はないが、そこから自立していないものかを氏が持ち続けていたことを明らかにしている。

本書の最終章、第二部第六章に「同和奉公会についてのノート」を置いたことは、秋定氏がそのことを承知していることを確かめさせるものである。同論文では、一九九五年に雑誌『部落解放』三九三号に載せられた秋定氏を含む五人の研究者による討論会報告「敗戦五〇年と全国水平社」を取り上げ、以下のように論じている。

まず、四〇一頁三行目から五行目、藤野豊氏の報告に対して、

この報告に対して、部落民の多くは部落第一主義的な生活と糾弾などのあり方を重視しており、アジア問題、移民問題は二次的な視点でみていたのではないか、イデオロギー分析を中心にしては運動や組織、生活から発する行動は究明できないのではないか、戦時経済に協力して生活すれば転向なのか、などが論じられた。

という。また、四〇一頁八行目から十行目、朝治武氏の報告に対しては、

議論は、なぜ「この時期にふさわしい糾弾の論理」ができなかったか、地域社会での制度や慣習のなかの差別を問題にせず、水平社運動側はなぜ発言や動作を問題にしたのかに集中した。

といい、四〇一頁十八行目では、

この討論会は、戦時下の解放運動と社会について今後の究明をまつ内容でもある。

ともいう。

藤野氏や朝治氏の報告内容を知らないし、秋定氏が整理して示す議論が誰によって主張されたものかも知れないが、至極まっとうなものであり、部落問題の本質を巧みにすくい取ることに成功した論だと思う。さらにいえば、そうした論が戦後すぐに、せめて一九六〇年代にも見られていれば部落差別は解決していませんまでも、解決に向かって確実に前進していたとも思う。

秋定氏は「今後の究明をまつ」といい、それ以上には踏み込まない。したがって、討論会での議論に対する秋定氏の評価はこの論文のかぎりではわからないが、「イデオロギー分析を中心にしては運

動や組織、生活から発する行動は究明できないのではないか」との主張は「体制内の努力であれ生活擁護と改善につとめ、差別の解消にたちむかった方向」を評価する姿勢と一致する。本書が「遺稿集」だとすれば、その最終章は秋定氏の「今際の際の一言」になるはずであり、だとすれば「今際の際」に秋定氏は二つ目の通奏低音、つまり耳鳴りから解放されたということになるのか。

毀誉褒貶のいずれに当たるかはわからない。もし毀と貶と思われたならばご寛恕を願うしかないが、秋定氏は早くに生まれすぎた研究者だと思う。もし、あと少しせめて二十年遅く生まれていたら、部落を「孤独な左翼革命の強力な味方」に閉じこめて置きたい人々の妄想から解放され、「イデオロギー分析を中心にした」ものではない「運動や組織、生活から発する行動」の意味の究明が氏によって成し遂げられたのではないかと考えるためである。

秋定氏の「遺稿集」は入り込んで久しい袋小路から部落問題を脱出させる確かなよすがになるはずである。一読を願いたい。

(奈良県立同和問題関係史料センター所長)

2006年度部落史連続講座 一京都の被差別部落と教育 その2一

- 第1回 11月16日(木) 「児童融和教育の模索と井手小学校の実践」
伊藤 悦子さん(京都教育大学教授)
- 第2回 11月24日(金) 「戦前京都の母子福祉・教育一京都市児童院を中心にして一」
杉本 弘幸さん(京都市市政史編纂助手)
- 第3回 12月 8日(金) 「戦時下の京都市の市民生活と教育」
秋定 嘉和さん(当資料センター所長)

◇時間：午後6時30分～8時30分◇場所：京都府部落解放センター2階 実習室◇参加費：無料

第32回部落解放文学賞

部落解放 570号 (解放出版社刊, 2006.8) : 630円

特集 狭山第三次再審請求

きみとぼくの、あいだ 30 「唾」から「あ」までの距離

平野広朗

本の紹介

『日・韓「共生社会」の展望 韓国で実現した外国人地方参政権』(田中宏・金敬得共編) / 『「マンガ嫌韓流」のここがデタラメ』(太田修・朴一ほか著) / 『教育基本法「改正」のここが問題』(『週刊金曜日』編) / 『トヨタの正体』(横田一・佐高信+『週刊金曜日』取材班)

生きている部落文化 共感の糸を奏でよう 上 川元祥一

追悼 萱野茂さんを偲んで 松本龍

数字では伝えきれない実態、その奥にあるもの 長野県中高地区同和地区生活実態調査にとりくんで 高橋典男
差別の歴史を考える 23 文明開化期の女性解放論 ひろたまさき

部落解放 571号 (解放出版社刊, 2006.9) : 630円

特集 教育格差を乗り越える 公立学校再生と社会的排除
曝される差別=仮想空間からの個人攻撃 尼崎インターネット差別事件から考える 細見義博

生きている部落文化 共感の糸を奏でよう 中 川元祥一

差別の歴史を考える 24 近代文明が生む差別 ひろたまさき

部落解放 572号 (解放出版社刊, 2006.10) : 630円

特集 人権を考える

人権とは何か 金子匡良 / 人権・法・民主主義 川村暁雄 / 人間の権利を教えない人権教育? 人権教育を市民の視点から批判的に検証する 阿久澤麻理子 / 部落解放の武器としての人権 和田献一 / 人権行政とは何か 人権行政の概念整理にむけて 北口末広

『破戒』の新たな発見 リバティおおさか第59回特別展 島崎藤村『破戒』百年 太田恭治

「頭突き」が明らかにしたもの 差別的言動でも許容されるべきなのか 及川健二

差別の歴史を考える 25 人間平等と優勝劣敗 ひろたまさき

部落解放研究 171号 (部落解放・人権研究所刊, 2006.8) : 1,000円

特集 近代都市の展開とスラム・部落

帝都東京の在日朝鮮人と被差別部落民 外村大 / 横浜の<スラム>をなぞる / に問われる 阿部安成 / 近代都市大阪と「釜ヶ崎」—1900~20年代の都市下層社会— 吉村智博

「学校教育診断」と「わが家の家庭教育診断」の結果から 森山康浩

フランス郊外暴動と「若者」の叛乱 川野英二

書評 『人権教育の未来—教育コミュニティの形成と学校改革』(池田寛著) 安彦忠彦 / 『日本から世界への発信—職業と世系に基づく差別』(部落解放・人権研究所編) 桐村彰郎

部落史関係文献目録 (2005年4月~2006年3月)

部落解放ひろしま 79号 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2006.7) : 1,000円

特集 憲法形骸化・改悪は許さない

部落解放同盟中央本部「『憲法改正問題』への中間提言」

批判 岡田英治

本願寺史料研究所報 29号 (本願寺史料研究所刊, 2006.7)

花山火葬場について 1 左右田昌幸

本願寺史料研究所報 30号 (本願寺史料研究所刊, 2006.8)

花山火葬場について 1 承前 左右田昌幸

花山火葬場について 2 左右田昌幸

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 21号 (信州農村開発史研究所刊, 2006.3)

松代猿屋の上田来訪 尾崎行也

朝倉重吉と農民自治会 農民解放への期待と挫折 川向秀武

五郎兵衛新田高田和人家文書の紹介 佐藤敬子

山本正男=政夫研究会会報 1 (山本正男=政夫研究会刊, 2006.5)

1930年~34年の山本正男について 秋定嘉和

山本正男=政夫研究会の課題と方向 朝治武

山本正男著作目録 1 1922年~1926年

ライツ 86 (鳥取市人権情報センター刊, 2006.7)

今月のいちおし! 『さん さん さん~幸せは、いろいろなかたちでそこにある~』(佐々木志穂美著) 小宮山聖美

ライツ 87 (鳥取市人権情報センター刊, 2006.8)

今月のいちおし! 「同和・人権保育のカリキュラム作成に向けて」(大阪保育子育て人権情報研究センター刊)

ライツ 88 (鳥取市人権情報センター刊, 2006.9)

今月のいちおし! 映画「スタンドアアップ」 椋田昇一
リージョナル 2 (奈良県立同和問題関係史料センター刊, 2006.9)

高田町「米騒動」始末 (上) 中村泰彦

村の要件—添下郡矢田村と新村の争論から— 井岡康時

法隆寺東西両郷とはどこか? 奥本武裕

『振濯録』の原稿料 吉田栄治郎

リベラシオン 人権研究ふくおか (「部落解放史・ふくおか」改題) 122号 (福岡県人権研究所刊, 2006.6) : 1,000円

特集 北九州の人権文化のまちづくり

被差別民・白丁 衡平運動発祥の地・晋州を訪ねて 遺産

に学んだ「真の解放運動は市井の場から」 西尾紀臣

福岡県人権啓発ビデオ制作委員を経験して見えてきたこと 多比良建夫

にんげん・羽音豊 6 羽音豊調査研究プロジェクト

識字学級35年生 木村かよ子

訪ねてみませんか? 朝鮮人強制連行関係の碑文を比較しながら 堀内忠

書評 『はじめての部落問題』角岡伸彦著 加藤陽一

- 特集 福田村事件・生存者の遺族関係者に聞く
月刊スティグマ 124号 (千葉県人権啓発センター刊, 2006.8) : 500円
- 同和教育実態調査報告 A市M地区・B町K地区同和教育実態調査報告 黒坂愛衣
まとめ 部落差別の現在と同和教育実践の必要性 黒坂愛衣
- 世界人権問題研究センター研究紀要 11号 (世界人権問題研究センター刊, 2006.3)
- 死刑廃止国に対する新たな義務—ジャッジ対カナダ事件 (通報番号829/1998) をめぐって 坂元茂樹
- 入国管理措置に対する不服審査制度と権利侵害に対する実効的救済手段を得る権利—ヨーロッパ人権条約13条に関する判例の展開の側面— 小畑郁
- 戦前における藤範見誠の活動と融和教育の創造 伊藤悦子
- 「被差別部落認識」の形成と近代部落問題の成立—明治期・神戸のメディア史的展開を中心に— 本郷浩二
- 敗戦直後における日本政府・朝鮮関係者の植民地統治認識の形成—『日本人の海外活動に関する歴史的調査』成立の歴史的な前提 宮本正明
- フェミニストカウンセリング—「もうひとつの」心理療法としての位置 井上摩耶子
- 米国主権免除法による従軍慰安婦訴訟 西立野園子
- 自衛官合祀拒否事件と自由権規約 朴洪吉
- 史料紹介 『在日同胞の実態』 梁永厚
- 月刊地域と人権 270 (全国地域人権運動総連合刊, 2006.7) : 350円
- えせ同和行為の実態 洞口浩史
- 月刊地域と人権 271 (全国地域人権運動総連合刊, 2006.8) : 350円
- 特集 全国人権連第2回定期大会
- 月刊地域と人権 272 (全国地域人権運動総連合刊, 2006.9) : 350円
- 岡映さん追悼の言葉 「巨星墜つ」 岩間一雄
- 故村崎勝利さんを偲んで 丹波正史
- であい 532 (全国同和教育研究協議会編, 2006.7) : 150円
- 人権のまちをゆく 32 伊勢鳥居前町と民衆・被差別民 その2 山崎幸喜
- 人権文化を拓く 112 よく生き合うということ 藤田敬一
- であい 533 (全国同和教育研究協議会刊, 2006.8) : 150円
- 人権のまちをゆく 33 金沢と朝鮮とのつながり
- 人権文化を拓く 113 「和解」のための日韓共同作業—映画「あんによん・サヨナラ」制作を通して 古川雅基
- どの子も伸びる 367 (部落問題研究所刊, 2006.8) : 735円
- 「人権教育」批判 今も続けられる「旧同和地区実態調査」の問題 谷口幸男
- どの子も伸びる 368 (部落問題研究所刊, 2006.9) : 735円
- 「人権教育」批判 「対話ですすめる人権学習」が示すもの 谷口幸男
- なら解放新聞 735号 (奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2006.6) : 140円
- 講演録 地域社会の歴史的諸相を考える 2 吉田栄治郎
- なら解放新聞 736号 (奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2006.7) : 140円
- 講演要旨 DV被害者の安全確保と自立支援はいま
- 講演録 地域社会の歴史的諸相を考える 3 吉田栄治郎
- なら解放新聞 737号 (奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2006.8) : 140円
- 講演録 地域社会の歴史的諸相を考える 4 吉田栄治郎
- ねっとわーく京都 211 (ねっとわーく京都21刊, 2006.8) : 500円
- 同和行政ウォッチング 運動団体系財団法人のどこに公益性があるのか—解放センター、みかけ会館用地ただ貸し問題 寺園敦史
- ねっとわーく京都 212 (ねっとわーく京都21刊, 2006.9) : 500円
- 裏金と同和<宴会>行政 寺園敦史
- ヒューマンライツ 220 (部落解放・人権研究所刊, 2006.7) : 525円
- 走りながら考える 63 「飛鳥会事件」の分析を徹底して行う—自らを律し、報道の検証を— 北口末広
- 書評 部落解放・人権研究所編『日本から世界への発信 職業と世系に基づく差別』 部落問題を国際的な視野で位置づける 李嘉永
- ヒューマンライツ 221 (部落解放・人権研究所刊, 2006.8) : 525円
- 忌避意識に支えられる差別意識—2005年大阪府人権問題意識調査より 奥田均
- 走りながら考える 64 不当な一般化を招かない報道を—同和行政の評価が歪められていないか— 北口末広
- 書評 『自覚と誇り 「大阪の部落史」を読む 近現代』 阿南重幸
- ヒューマンライツ 222 (部落解放・人権研究所刊, 2006.9) : 525円
- シンポジウム 「鳥取県人権救済条例」と「人権侵害救済法」
- 走りながら考える 65 同和行政の重要な局面を迎えている—同対審答申の精神を忘れていないか— 北口末広
- ひょうご部落解放 121 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2006.6) : 700円
- 特集 おしよせる人権抑圧の波
- 再び兵庫の部落史に学ぶ 1 心に潜む偏見・差別意識を越えるために 安達五男
- 映画の紹介 「あんによん・サヨナラ」 高吉美本の紹介
- 『「在日コリアン」ってなんでんねん?』 (朴一著) / 『性虐待の父に育てられた少女 蘇生への道』 (川平那木著)
- 部落解放 569号 (解放出版社刊, 2006.7) : 1,050円

研究所通信 337(部落解放・人権研究所刊, 2006.9) : 100円

最近の文献から 熊沢誠『若者が働くとき―「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず―』

こべる 161 (こべる刊行会刊, 2006.8) : 300円

師岡佑行さんを悼む

梅雨の終わり―沖繩にて 中村大蔵/師岡佑行さんを偲ぶ 藤田敬一

横浜・寿識字学校から 4 戦火のなかでの学び 大沢敏郎
校長退職―鳥の目と虫の目 長谷川洋子

いのち―生き合う 4 妻との別れ 杉山光洋

こべる 162 (こべる刊行会刊, 2006.9) : 300円

「学力保障」で保障できないこと 中西仁

君、何ぞはるかなる―師岡佑行さんの最期 岡田輝雄

白葉年賀状―小学校三年生たちからの便り 三谷素子

こべる 163 (こべる刊行会刊, 2006.10) : 300円

部落のいまを考える 99 部落問題はなぜいまも残っているのか―角岡伸彦著『はじめての部落問題』を読んで 袖岡正禎

ある光景 18 韓国旅行記―二人だけの団体旅行 高田嘉敬

学校の風景から 6 プール 中西宏次

コリアNGOセンターNewsLetter 8/9号 (コリアNGOセンター刊, 2006.8)

特集 多民族多文化共生と日本

書評 『差別と抵抗の現象学―在日朝鮮人の経験を基点に―』 (郭基煥著)

書籍紹介

『あの戦争を伝えたい』 (東京新聞社会部編) / 『韓国現代史』 (文京洙著) / 『新版 在日コリアンのアイデンティティと法的地位』 (金敬得著)

月刊滋賀の部落 393 (滋賀県同和問題研究所刊, 2006.7) : 400円

滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 4 鈴木俊亮
月刊滋賀の部落 394 (滋賀県同和問題研究所刊, 2006.8) : 400円

滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 5 鈴木俊亮
月刊滋賀の部落 395 (滋賀県同和問題研究所刊, 2006.9) : 400円

滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 6 鈴木俊亮
人権21 調査と研究 183 (岡山人権問題研究所刊, 2006.8) : 650円

特集 靖国問題

特集 岡映さんと出会って

人権と部落問題 748 (部落問題研究所刊, 2006.8) : 630円

特集 米軍再編と基地問題

本棚

『架け橋―町民が主人公 開かれた黒田庄のあゆみ』

(東野敏弘著) 山田兼三 / 『立憲平和主義と人権』
(上田勝美著) 奥野恒久 / 『国民融合の道30年―同和岐阜県民会議30年のあゆみ』 (同和岐阜県民会議編)

尾川昌法

文芸の散歩道 幕末の穢多, 非人の抗争―塩見鮮一郎
『浅草弾左衛門』 『車善七』 渡邊巳三郎

差別と向き合うマンガたち 29 地獄の想像力―人間の業をどう描くか― 田中聡

戦後同和行政の展開と支配政策 4 反共・分断・懐柔政策としての同和对策 杉之原寿一

人権と部落問題 749 (部落問題研究所刊, 2006.9) : 630円

特集 高校生の自主活動

文芸の散歩道 大日本帝国憲法・教育勅語発布のころ―夏目漱石と明治を歩く 5 ― 水川隆夫

差別と向き合うマンガたち 30 差別表現に世界標準はあるか―『エマ』をめぐる論争― 表智之

戦後同和行政の展開と支配政策 5 政府・自民党主導の同和对策事業特別措置法の制定過程 上 杉之原寿一

人権と部落問題 750 (部落問題研究所刊, 2006.9) : 1,155円

特集 格差社会の拡大と生きる権利

部落問題をめぐる主な動き (2005年4月~2006年3月)

2005年度部落問題研究所定期誌総目次

『人権と部落問題』 (730号~743号), 『部落問題研究』 (173輯~175輯), 『どの子も伸びる』 (350号~362号)

季刊人権問題 344 (兵庫人権問題研究所刊, 2006.7) : 735円

芦原病院問題と「飛鳥会事件」で明らかになった大阪市の乱脈・不公正な同和行政とその終結をめざす取り組み―日本共産党大阪市議員団の報告 山田隆義
季刊『人権問題』の総目次

人権問題研究 6 (大阪市立大学人権問題研究会刊, 2006.3)

キャンパス・セクシュアル・ハラスメントを考える~防止・相談・解決のための基本的視点~ 岩堂美智子

「もううそつかんと生きていける」ハンセン病隔離被害者人間性回復への道 川島保, 友岡雅弥

「知的障害」児の卒業後の地域生活における現状と課題 共生教育を選択した保護者への聞き取り調査から 西村愛

15年戦争期の日本による医学犯罪 土屋貴志

カンボジアにおける仏教と人権の架橋作業 民主主義に関する権利を中心に 木村光豪

信州農村開発史研究所報 94・95号 (信州農村開発史研究所刊, 2006.3)

「上高井平等会長」印が見つかる 斎藤洋一

蔵書・資料類から垣間見えるもの―朝倉資料書庫 3 川向秀武

吉村昭さんへのお願い 斎藤洋一

月刊スティグマ 122号 (千葉県人権啓発センター刊, 2006.6) : 500円

賢三著)

解放新聞 2278号 (解放新聞社刊, 2006.7.24) : 80円
今週の1冊 『<子別れ>としての子育て』 (根ヶ山光一著)

解放新聞 2279号 (解放新聞社刊, 2006.7.31) : 80円
今週の1冊 『日本の失敗 「第二の開国」と「大東亜戦争」』 (松本健一著)

山口公博が読む今月の本

『天と地と人の中で 生態学から広がる世界』 (鷺谷いづみ著) / 『青邱野談』 (野崎充彦編訳注) / 『世のなか安穏なれ—「歎異抄」いま再び』 (高史明著)

解放新聞 2280号 (解放新聞社刊, 2006.8.7) : 80円
解放の文学 5 長津功三良と原爆詩集『影たちの葬列』

音谷健郎

今週の1冊 『靖国神社「解放」論 本当の追悼とはなにか?』 (稲垣久和著)

ぶらくを読む 14 かくも長き良識の不在はなぜ起きたか「癩病」と部落 湧水野亮輔

解放新聞 2281号 (解放新聞社刊, 2006.8.14) : 80円
今週の1冊 『椰子の木陰で』 (岡真理著)

解放新聞 2282号 (解放新聞社刊, 2006.8.21) : 80円
今週の1冊 『俺たちのR25時代』 (R25編集部編)

解放新聞 2283号 (解放新聞社刊, 2006.8.28) : 80円
今週の1冊 『新版 戸籍と人権』 (二宮周平著)

山口公博が読む今月の本

『明平さんのいる風景 杉浦明平生前追想集』 / 『カワハギの肝』 (杉浦明平著) / 『近代の奈落』 (宮崎学著) / 『鍼灸の挑戦 自然治癒力を生かす』 (松田博公著)

解放新聞 2284号 (解放新聞社刊, 2006.9.4) : 120円
解放の文学 6 城山三郎と『大義の末』 一天皇制と向き合う 音谷健郎

今週の1冊 『憲法は、政府に対する命令である。』 (ダグラス・ラミス著)

ぶらくを読む 15 隔離を根底で支えたケガレ観念「癩病」と部落 湧水野亮輔

解放新聞 2285号 (解放新聞社刊, 2006.9.11) : 80円
ニート・引きこもりの解決をめざす 1 雑居福祉村

今週の1冊 『日中関係 戦後から新時代へ』 (毛里和子著)

解放新聞 505号 (岡山解放新聞社刊, 2006.6)

全国水平社の創立といま 2003年6月1日 岡山県水平社創立80周年記念集会講演要旨 1 師岡佑行

解放新聞 506号 (岡山解放新聞社刊, 2006.7)

全国水平社の創立といま 2003年6月1日 岡山県水平社創立80周年記念集会講演要旨 2 師岡佑行

解放新聞大阪版 1659号 (解放新聞社大阪支局刊, 2006.9.18) : 70円

「飛鳥会等事件」の総括と府連見解 2006年9月9日

解放新聞改進黨 348号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2006.6)

教育改革と同和教育 教育改革は、子どもたちに何をもたらしたのか 4 教育改革と格差の拡大

改進黨地区の歴史 5

解放新聞改進黨 349号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2006.7)

教育改革と同和教育 教育改革は、子どもたちに何をもたらしたのか 5 同和教育から人権教育へ、そして心の教育に

解放新聞改進黨 350号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2006.8)

教育改革と同和教育 教育改革は、子どもたちに何をもたらしたのか 6

改進黨地区の歴史 6 伏見奉行所と野田村

解放新聞改進黨 351号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2006.9)

京都市職員の不祥事についての府連書記長声明

改進黨地区発 同和教育の変遷を探る 明日への架け橋 1

改進黨地区の歴史 7

解放新聞京都版 726号 (解放新聞社京都支局刊, 2006.7.1) : 70円

むこうにみえるは 改進黨の部落史 2

解放新聞京都版 727号 (解放新聞社京都支局刊, 2006.7.10) : 70円

むこうにみえるは 改進黨の部落史 3

解放新聞京都市版 179号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2006.9) : 100円

探訪 部落の近・現代史 7 市街電車転覆事件 改進黨

架橋 15号 (鳥取市人権情報センター刊, 2006.9)

特集 ハンセン病問題はいま…「らい予防法」廃止10年、「らい予防法」違憲国賠訴訟判決」5年

語る・かたる・トーク 137 (横浜国際人権センター刊, 2006.7) : 500円

信州の近世部落の人びと 15 斎藤洋一

同和問題再考 67 「答申」は出たけれど… 田村正男

わたしと部落とハンセン病 10 林力

部落差別の現実 48 寝た子を起こすな論の実態 1 江嶋修作

語る・かたる・トーク 138 (横浜国際人権センター刊, 2006.8) : 500円

わたしと部落とハンセン病 11 林力

信州の近世部落の人びと 16 斎藤洋一

同和問題再考 68 ねじ曲げられた「答申」の精神 田村正男

部落差別の現実 49 寝た子を起こすな論の実態 2 表に出ない差別事件 5 江嶋修作

季節よめぐれ 224号 (京都解放教育研究会刊, 2006.9)

戦後60年を超えて 在日100年史を考える 金井英樹

季節よめぐれ 225号 (京都解放教育研究会刊, 2006.10)

死んだら終わり、だから生きるんだ—多文化共生へのかけはし— 具志アンデルソン 飛雄馬

グローブ 46 (世界人権問題研究センター刊, 2006.7)

同和問題に関わる調査の困難に直面して 伊藤悦子

東九条地域に根ざして—多文化共生保育— 崔忠植

収集逐次刊行物目次 (2006年7月~9月受入)

~各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました~

明日を拓く 65 (東日本部落解放研究所刊, 2006.3) : 1,050円

特集 被差別部落の生業—その諸相

足利市板倉地区の山仕事—三ツ俣唯一郎さん、山田定夫さんに聞く—

齋藤洋一氏に聞く 新著『被差別部落の生活』をめぐる

骨・血・筋・臓器の利用史と化製業の社会的評価について 中島久恵

史料紹介 『明治前期大審院民事判決録』から その1 土地所有・地券の交付をめぐる東京の二件 藤沢靖介

跡地発 34 (大阪市人権協会, 大阪市よさみ人権協会刊, 2006.7)

十人十色の部落問題 27 靖国神社ってなに? 今、日本から平和のメッセージを。 服部良一

岡山部落解放研究所報 278号 (岡山部落解放研究所刊, 2006.5) : 100円

定例読書会『「部落史」論争を読み解く』報告 好並隆司

「わが人生~岡山県の部落解放運動史~」2 黒田義夫

岡山部落解放研究所報 279号 (岡山部落解放研究所刊, 2006.6) : 100円

定例読書会『「部落史」論争を読み解く』報告 近井弘昭

解放教育 465 (解放教育研究所編, 2006.8) : 740円

特集 1 暑い夏を学んで超える—教職員研修に関わる問題提起と案内

特集 2 教育基本法にチャンスを一教育を創造するために

元気のもとつながる仲間 17 横に立たなければ聞こえない子どもたちの声 外川正明

倫敦マイノリティ事情 5 イングランドのコミュニティと教育 院生のみたイギリス 石川朝子・奥村美保

解放教育 466 (解放教育研究所編, 2006.9) : 740円

特集 子どもの居場所づくりと総合学習

元気のもとつながる仲間 18 セイルオフ (出航) —自分がやらんで誰がやるんじゃー 外川正明

解放教育 467 (解放教育研究所編, 2006.10) : 740円

特集 現代的部落問題学習の視点と教材

元気のもとつながる仲間 19 渋染一揆150年に一熱い思いと社会を見抜くカー 外川正明

倫敦マイノリティ事情 7 マイノリティの子どもへの英語習得支援—イングランドとスコットランドの学校から— 新矢麻紀子

解放研究しが 16号 (反差別国際連帯解放研究所しが刊, 2006.5)

成人の人権学習に関する一考察 上杉孝實

統計データのすき間を生きる人びと—被差別部落人口の流出入をめぐる— 三浦耕吉郎

部落を語り、わたしを語り、部落を伝える—同和対策事業後における被差別部落居住者の地域および自己への認識の現状と課題— 山本哲司

「5つの壁を突き崩す」—由美さんの一年を追う— 田中政明

「パッチギ!を見ながら」—パッチギ!を見ながらいろんなことを思い出していた— 美濃部薫

解放新聞 2275号 (解放新聞社刊, 2006.7.3) : 80円

解放の文学 4 大佛次郎と「敗戦日記」—堅持した市民的良識 音谷健郎

今週の1冊 『この国に思想・良心・信教の自由はあるのですか』 (思想・良心・信教の自由研究会編)

ぶらくを読む 13 国際身分研究とインド被差別民研究 湧水野亮輔

解放新聞 2276号 (解放新聞社刊, 2006.7.10) : 80円

今週の1冊 『変えよう!日本の学校システム 教育に競争はいらない』 (古山明男著)

解放新聞 2277号 (解放新聞社刊, 2006.7.17) : 80円

今週の1冊 『「分ける」こと 「わかる」こと』 (坂本

事務局より

本年度第2期の部落史連続講座を開催します。7頁に案内を掲載していますので是非ご参加ください。

6月に亡くなられました元京都部落史研究所所長 師岡佑行さんの蔵書の一部をご遺族のご厚意により寄贈していただきました。整理には今しばらく時間がかかりますが、貴重な資料として利用に供する予定です。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

□開室日時 月曜日~金曜日 第2・4土曜日 10時~17時 (祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅 (京都駅より約10分) 下車 北へ徒歩2分